

お接待文化から見た四国遍路のブランド価値

愛媛大学 法文学部 教授

四国遍路・世界の巡礼研究センター 副センター長 胡 光



1 ニューヨーク・タイムズ2015から

平成27(2015)年1月、ニューヨーク・タイムズ紙ホームページで、その年訪れるべき世界の52ヶ所が発表され、日本で唯一「四国」が選ばれて、「四国遍路の場所」として紹介された。以来、外国人遍路の姿は確実に増えている。彼らは必ず、遍路の白装束を着て歩いて遍路をする。彼らが日本の中で四国を選ぶのは、ロストジャパン—失われた日本の自然や文化を四国の中に求めることが多く、遍路をした後の感想では、四国の自然や人々(「お接待」)への称賛が加わる。私自身も彼らを案内した時には、同様の答えが返ってきた。

ニューヨーク・タイムズ紙では、四国遍路に1200年の歴史があり、特に松山は札所が集中する重要な場所であるとともに、120年前に建てられた楼閣のような日本最古の温泉があると特筆している。よくできたキャッチコピーで、世界の人々を四国へ、そして松山へと誘ってくれているようである。しかしそれだけではなく、この文章には四国遍路や道後温泉の特徴が凝縮されている。

この記事が出た前年に、四国遍路は開創1200年を迎え、四国4県で記念行事を行い、観光客数も大幅に増加した。同年は、重要文化財に指定されている道後温泉本館も建設120年を迎えている。本館を建てた大工棟梁坂本又八郎は、幕末に松山城天守閣再建に関わった人物であり、当時としては天守閣に次ぐ豪壮な木造建築が出現したのである。

本館が完成したのは、明治27年(1894)日清戦争の年であり、まさに『坂の上の雲』の時代である。翌年、松山中学に赴任した英語教師・夏目漱石は、後に『坊ちゃん』を著し「ほかの所は何を見ても東京の足元に及ばないが温泉丈は立派なものだ」と完成直後の道後温泉の雄姿を記している。

現在、道後温泉でお遍路さんの姿をみかけることはな

いが、本館完成以前には全てのお遍路さんが訪れる場所であって、四国遍路と道後温泉を合わせて紹介したニューヨーク・タイムズの記事は故なしとしない。

この記事が紹介された年、四国遍路は、文化庁から日本遺産「四国遍路～回遊型巡礼路と独自の巡礼文化」に、観光庁から広域観光周遊ルート「スピリチュアルな島～四国遍路～」の認定を受けた。これらは新たに創設された制度で、外国人観光客誘致のためのストーリーがいち早く評価されたと言える。

四国遍路に大きな注目が集まっていた同年には、愛媛大学でも、法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センターが開設され、四国はもとより全国でも唯一の巡礼研究センターとして活動を始めた。センターには、国内研究部門(歴史文化研究班・現代社会研究班)と国際研究部門が設けられ、学部内外から歴史学・文学・社会学・哲学・法律学・経済学・観光学など多様な分野の教員が24名所属して、四国遍路の歴史や現代社会における遍路の実態を解明し、世界の巡礼との国際比較を行っている。ここでの研究・教育活動は、①四国の文化を世界に発信、②次世代への伝統文化継承、③四国遍路の世界遺産化を学術的に推進するものである。

2 四国遍路の成立

四国遍路は、徳島・高知・愛媛・香川の四県からなる、四国一円に広がる弘法大師空海ゆかりの八十八箇所霊場を巡る全長1400kmに及ぶ壮大な回遊型巡礼である。

四国遍路の原型は、1200年以上前に空海が行ったような、四国の自然と同化しようとする山林修行であった。讃岐の豪族佐伯氏出身の空海自身が記した出家宣言書『三教指帰』(原本漢文、元は『聾瞽指帰』平安時代初・延暦16年・797)には、厳しい修行の様子が詳しい。

奈良時代に、大自然の難所で苦行し身を清め功德を得



西日本最高峰石鎚山を拝する
第60番札所横峰寺奥之院星ヶ森（国指定名勝）



「辺地修行」の世界を体験する愛媛大学生

る「浄行」が流行し、平安時代には、都から離れた山海の難所を回遊する「辺地修行」へと展開して、多くの僧が四国へ渡ってきた。伊予石鎚山や阿波大瀧ヶ嶽などへの山岳信仰、浄土への入口としての土佐室戸岬など、都から南西に位置する四国は聖なる島としての信仰が篤かった。平安時代末（12世紀）に著された『今昔物語』『梁塵秘抄』には、「四国の辺地」の語が見える。

讃岐（現在の善通寺）に生まれ、四国で悟りを開いた空海は、唐で密教を学び、大日如来や不動明王など新たな仏と、曼荼羅など難解な教義を可視化するシステムを伝え、仏教の世界観を日本に広めた。さらに、医学・土木・文学・教育など多方面での活躍が国民的な信仰を誕生させた。没後86年に醍醐天皇から弘法大師の尊号を賜り、高野山奥之院で永遠の瞑想を続ける大師として尊崇を集めるようになると（入定信仰）、鎌倉時代には大師の遺跡を巡る修行が始まり、「四国辺路」と呼ばれる巡礼としての形を整えてくる。

弘法大師が「四国辺路」を開創したことを記す最古の史料は、道後石手寺の由緒を記した室町時代・永禄

10年（1567）の「刻板」である。衛門三郎という富豪が私欲を肥やし仏神を信じないため、8人の男子が死に、自ら剃髪して四国辺路を行った。阿波焼山寺で病死するとき、伊予国司になることを望み、空海は八塚右衛門三郎と書いた石を握らせる。後に河野家でこの石を握った男子が誕生し、ゆかりの安養寺に奉納して、石手寺と改称したという。

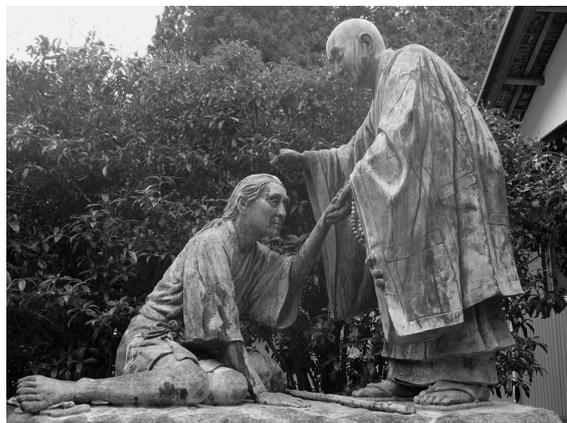
この史料は、四国遍路開創を伝えるだけでなく、「死と再生」という四国遍路の重要なモチーフを示している。現在、遍路を行う理由を問うと、先祖供養・自分探し・チャレンジなど様々な回答があるが、共通点は、多様な悩みから解放され、再生して帰っていくことである。遍路を救済するのは、弘法大師であり、四国の地である。

ちなみに、石手寺史料に開創年は天長8年（831）、空海晩年58歳（62歳で没）と記されるが、現在では弘仁6年（815）空海42歳の厄除け開創伝説が信仰されており、平成26年（2014）が開創1200年とされた。

さらに、在地の神々の信仰に加え、熊野や白山、観音信仰も伝わってきていたが、弘法大師信仰は、「大師一



第51番札所石手寺（塔は国指定重要文化財）



第12番札所焼山寺山麓にある杖杉庵の衛門三郎像

尊化]によって、あらゆる宗教宗派を包含し、統合する「四国遍路」という巡礼を完成させた。弘法大師信仰がさらに高まると、江戸時代までに多様な宗教宗派の八十八の札所が固定されるとともに、後に全ての札所に大師堂が建立され巡拝されるという特殊な巡礼形態を持つようになった。このことは、特定の修行僧が行う「修行」から一般庶民が巡る「巡礼」へ移行することも意味する。庶民への「四国遍路」定着を担ったのは、案内本を著し、遍路道を整備した真念に代表される庶民であった。

3 四国遍路の発展

四国遍路がいつから八十八箇所を廻る巡礼となるのかは未だ解明できていない。確実な文献で確認できるのは、寛永8年（1631）刊の古浄瑠璃『せつきやうかるかや』の「四国へんと八十八か所とハ申すなり」の記述であった。少なくとも江戸時代の初期には八十八箇所が成立していたことが分かる。これより先、徳島藩では、慶長3年（1598）駅路寺を定め、旅人の保護と監察を行っているが、この中に「辺路」の文字が見え、通常の旅人と区別できる姿の遍路が一定数あったことが推察できる。遍路が残した最古の日記は、承応2年（1653）の澄禪「四国辺路日記」（宮城県塩釜神社蔵）である。札所の成立が確認できるとともに、未整備の道、荒廃した札所など江戸時代初期の状況をよく示す。

貞享4年（1687）、初めての案内本である真念『四国辺路道指南』が出版される。重版を重ね、書名が「辺路」から「徧礼」「徧路」に替わっていくように、修行の辺路から巡礼の徧路への転換期となった。真念は、同書出版の理由を老若男女が四国遍路できるようにと記し、本文では歩きやすい道を選んで紹介した。自身も200基以上の道標を建て、徧路宿を整備した。

四国八十八箇所霊場の一番札所は阿波鳴門にある霊山寺である。阿波の対岸は畿内・紀伊にあたり、最も人口の多い地域であるとともに、弘法大師が入定する高野山に近い。初めての案内本『四国辺路道指南』は大坂の高野聖真念が、初めての案内図・宝暦11年（1761）『四国徧礼図』は摂津の細田周英が、大坂で刊行した。このため、大坂から徳島・志度・高松・丸亀への渡海が紹介され、本州が下部、四国が上部（南が上）という畿内目線の図が描かれる。案内本刊行直後の元禄4年（1691）



重版された『四国徧礼図』（当センター蔵）

には、歌舞伎『四国辺路』が京都で上演されており、畿内で四国遍路ブームが興っていた。

その後、金毘羅参詣の隆盛もあり、四国へ誘う多数の「引札」が登場する。当初、大坂から高松・丸亀へ向かう航路とともに、紀州加太から阿波撫養へ渡る航路も記されていたが、文化3年（1806）の讃岐丸亀港整備以降は、丸亀のみが描かれるようになる。

江戸時代後期の丸亀港、明治時代の高松港整備以前には、畿内に近い阿波が四国の玄関であり、徳島が四国最大の城下町であった。江戸時代初期までに成立した四国霊場八十八箇所においても、畿内との関係が阿波鳴門に一番札所を成立させた。

江戸中後期には、大師信仰がさらに拡大し、多くの札所で大師堂が建てられ始める。納札や納経帳が現われるのもこの頃である。各種の遍路日記には、接待や土産物の様子もうかがわれる。巡礼の遍路から「観光」を含む遍路への変化の兆候が認められる。

4 四国遍路の転換

近世初期までに成立した八十八箇所には、各国一の宮をはじめとする神社も多く含まれていた。明治維新の神仏分離令によって、八十八箇所からも神社が排除され、付近の寺院に札所が移されて今日に至る。札所寺院は、近世において寺領を与えられるなど各藩主の保護を受けていたが、この特権が奪われ、存続の危機に陥る。日本の伝統文化より西洋文化を重んじる風潮と警察の取り締まりもあり、四国遍路は衰退した。

【資料1】現在の四国霊場八十八ヶ所

- 真言宗79寺○真言律宗1寺○天台宗4寺○時宗1寺
- 臨済宗2寺○曹洞宗1寺



第41番札所龍光寺の参道は、
元の札所稻荷社へ続く（国指定史跡）

【資料2】 明治維新後の札所変更（数字は札所番号）

- (13) 一宮→大日寺 (30) 一宮→善樂寺 (37) 五社大明神→
岩本寺 (41) 稻荷宮→龍光寺 (55) 三島宮→南光坊
(57) 八幡宮→栄福寺 (62) 一宮→宝寿寺 (68) 琴弾八幡宮
→神恵院 (83) 一宮→一宮寺

明治時代後半には、日清日露戦争期の国威高揚運動の中、寺社の文化遺産を守る国宝制度の成立があり、四国でも霊場会が創設されるなど、霊場の復興が進められた。この頃までに、全ての霊場で大師堂が整えられる。各霊場ごとの案内図なども盛んに刊行され、外国向けの観光パンフレットも刊行された。

太平洋戦争期に再び衰退したと思われる遍路も、戦後バスツアーなどの開始で転機を迎え、観光の遍路が一層推進された。白衣などの装束も、この頃広まったことが最近明らかになってきた。バスツアーの嚆矢は、昭和28年（1953）の伊予鉄バスであり、昭和33年頃にはツアー客の正装として白装束が定着している。

四国遍路を含め、四国の観光客入込数が当時として最高を迎えるのは、瀬戸内三橋によって本州と結ばれる



第86番札所志度寺本堂・大師堂を参拝する遍路

1990年代である。観光客が減少に向かう2000年代には、四国遍路を世界遺産にという運動も始まった。観光客誘致を目的とする日本遺産や広域観光周遊ルートと異なり、世界遺産は自然・文化遺産の保護を本来の目的とする。このため、世界遺産になるためには多くの手続きが必要となる。

現在、我が国の世界遺産には、文化遺産18件、自然遺産4件が登録されている。世界遺産となるためには、文化庁が作成する「暫定一覧表」に掲載される必要がある。この中から、毎年1件ずつユネスコに推薦され、約1年半の審議を経て、世界遺産となる。

世界遺産がない四国では、4県と関係市町、経済界、霊場会、大学、ボランティア団体など産官学オール四国体制で世界遺産推進協議会を組織して、世界遺産化を進めており、愛媛大学でも学術面から支援を行っている。平成28年（2016）8月8日には、4県知事が世界遺産に向けた提案書を文化庁に提出し、「暫定一覧表」掲載を目指している。

近年では、毎年順調に世界遺産が誕生しているため、「暫定一覧表」掲載数が減少しており、追加掲載への期待が高まっている。その一方で、世界遺産となるためには、①資産の保護措置（日本では文化財指定）、②普遍的価値の証明がなされることが条件となっており、双方ともその前提には、研究が必要であり、センターでも各県庁に全面的な協力を行っている。

四国4県では、文化財指定のための調査を急ピッチで進めており、平成28年の文化庁への提案は、4県全ての遍路道の中に国指定文化財が誕生したことを背景とする。愛媛県内では、平成28・29年に、伊予遍路道として、稻荷神社境内及び龍光寺境内、仏木寺道、横峰寺道、横峰寺境内、三角寺奥之院、および八幡浜街道笠置峠越が国史跡に、星ヶ森が国名勝に指定された。本年も、観自在寺道が国史跡に追加指定される予定である。今後も世界遺産となりうる資産の確定と文化財指定拡張のための努力が続けられていく。

5 遍路日記に見る「接待」と道後温泉

筆者は、福岡県立図書館に保管された「佐治家文書」（佐治洋一氏蔵）について調べていたところ、「四国日記」なる史料に出会った。閲覧すると、果たしてこれまで研

究のない江戸時代・弘化2年（1845）における九州からの「遍路日記」であった。佐治家は、黒田長政に仕えた後、筑前国宗像郡津屋崎村（福岡県福津市）に土着し、宗像郡内最大の酒屋として栄え、多角経営を行った。

「日記」の行程は、津屋崎を出発して伊予国三津浜に上陸するまでに24日を要し、三津浜から北上し四国を一周、道後に至るまで55日、三津浜から津屋崎に戻るまで11日、2月22日に出発し5月23日まで合計90日間に及ぶ。日々の記述の最後には、里程、宿名、宿代、食事代などが記されている。

三津浜上陸後、四国遍路時の記述の特徴は、「接待」（接待）が現われることである。接待の内容、主まで詳細に記され、日々の最後には、納めた札数（参った札所数）と接待数が集計されている。まさに接待は、四国遍路の特徴であることを当時の人も認識していたのである。豪商一行にとっては、接待を受けずとも旅は可能であったが、接待を受けることも遍路には重要であって、町場で行っている「しゆ行」（修行／門付）とともに、修行と巡礼の旅の特徴を示している。

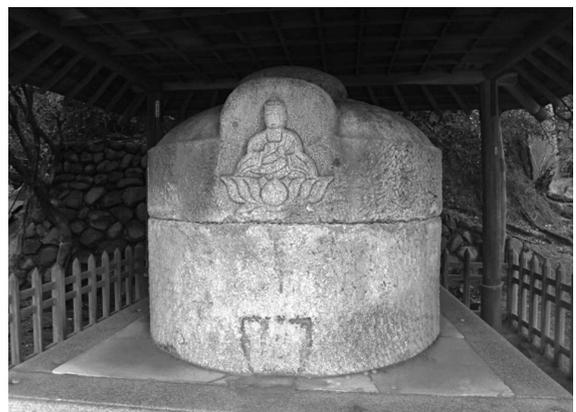
接待の内容は様々で、食料が最も多いが、月代髪結い、草鞋など、遍路に必要なものが全て含まれている。内容を集計してみると、最も多いのは、香物（漬物）21件と赤飯18件である。続いて、月代7件、銭5件、唐豆類5件、煮しめ4件、餅2件、草鞋2件があり、白飯・焼米・ひきわり飯・弁当・はったい粉・唐黍・葉・茶・豆腐・吸物が各1件記される。身の丈に合った、できる範囲での接待を行っていることが分かる。

このことは接待主の記載にも表れており、商人個人の場合もあるが、圧倒的に村民・町民が合同で行っていることが多い。さらに、接待主が記録されているということは、接待の際に必ず名乗っているということであり、接待する側も遍路と同様に神仏の加護を期待することになる。接待主は、自宅や自村で接待することもあるが、多くは他村から札所まで来て接待している事例が多い。しかも他国や島嶼部など遠隔地からも来ている。

佐治家一行が再び松山に戻ってから、結願の様子を5月12日条より見ておこう。最終日は、三坂峠を下って、46番札所浄瑠璃寺から始まり、最後の札所51番石手寺にて「此所打仕廻につき一切ぬき納メ又受」ことになる。そして、道後の湯につかり、「其夕御札仕廻の心祝いと



西方からの遍路を最初に迎える第52番札所太山寺本堂（国宝）



道後温泉の旧湯釜（県指定文化財）

て酒など買祝ひ申也」とくつろぎ、泊まる。衛門三郎伝説も記され、6ヶ寺も巡ったこの日は結願の日にふさわしい。翌日は、道後で土産を買い、城下を見物し、三津浜でまた土産を買い、なじみの下松屋で精進を落とし、夜に周防大島に向けて出港した。三津浜・太山寺から始まって、道後・石手寺で終る西方からの遍路は、巡礼としてもツーリズムとしてもよくできたコースと言える。

佐治家の「四国日記」の特色の一つに、女性同伴の旅のためか、毎日の風呂の様子が記される。しかし、四国内の温泉でくつろいだのは道後温泉のみである。

ここで、讃岐国吉津村（香川県三豊市）庄屋新延家の「四国順禮道中記録」（香川県立ミュージアム保管）を用いて、さらに遍路と道後温泉の関係を探ってみよう。本書の特徴としては、日記中に各所の状況や接待の様子が記されるほか、後半部に、土産の内容と宛先、見送り人名、金銭出納が記されていることがあげられる。遍路に係る必要経費といかに多くの土産を用意したかが判明し、信仰の旅から「観光」を含む旅へと変化する実態がうかがえる。

3月24日条によれば、道後横町船屋に滞留し、湯八幡宮や諸所見物し、土産を買い、温泉に入った。当時の道後温泉は、壱之湯：松山侯を始めとする武家の湯、弍之湯：婦人湯、三之湯：男湯、養生湯：男女混浴、馬之湯：牛馬湯の別があり、気さくな松山藩士によって、壱之湯を案内され、感嘆した様子が記されている。湯の区別があっても、全ての身分の人が温泉を利用しており、遍路も立寄っていたことが分かる。この時、遍路が見た湯釜は、弘法大師を崇敬する一遍が揮毫した湯釜だったはずである（県指定文化財／一遍の一族、河野家の居城湯築城跡にある道後公園安置）。

さらに、本書の土産記事では、最も多いのが「大師御影」、次が「道後艾（もぐさ）」なのである。何れも運搬しやすいことであろうが、心身を癒す遍路における大師信仰と道後温泉の重要性を物語ってしよう。

全てと言ってもよい遍路が道後温泉に立寄っていたことを記す史料が道後温泉管理事務所に伝わっている。その文書は、江戸時代に道後温泉の管理を松山藩から任されていた石手寺配下の明王院を通して出された「定書」である。前年の大震災によって止まった温泉が復興した際に改めて出した安政2年(1855)入浴心得である。第1・2条が「四国辺路」に関する規定であり、遍路が特別視されている様うかがえる。即ち、遍路は宿泊を認めるが、湯治だけの客は宿泊をしてはいけないこと、遍路をはじめ、正体不明の者や病気怪我人は養生湯に入ることが定められている。温泉と灸で遍路の疲れを癒し、その艾を土産に遍路を続けた。

道後温泉の文書を調査してみると、温泉と大地震との関係が注目される。南海地震のたびに湯が止まっている



道後温泉本館（国指定重要文化財）

のである。明治8年(1875) 気象台による地震観測開始以前の災害は、古文書を読み解くしかない。道後温泉に伝わる史料とその分析は災害対策にも有用であろう。

120年を経た道後温泉本館は、重要文化財を活用している稀有な例である。活用と保護を両立するため、まもなく耐震工事が始まる。夏目漱石『坊ちゃん』には「湯壺は花崗石を積み上げて、十五畳敷位の広さに仕切っている。…深さは立って乳の辺までであるから、運動の為に、湯の中を泳ぐのは中中愉快だ。…今日も泳げるかなとぞくろ口を覗いて見ると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。」と120年前の温泉内部が描かれる。現在は「坊ちゃん泳ぐべからず」の木札がかかる漱石ゆかりの温泉を、多くの遍路を癒してきた歴史とともに守っていかねばならない。

6 四国の文化—四国の求心力

四国遍路の発生譚には、大師のもとでの「死と再生の物語」が説かれる（永禄10年(1567)「石手寺刻板」）。巡礼者は大師の修行の道を通ることで、大師に「救い」を求め、四国の人々は、彼らに「お接待」することで大師に救われると信じた。「お接待」によって、庶民の巡礼が可能となり、何度も「回遊」することが可能となる。記録や伝承には、不治の病や怪我が遍路の途中で治った話が伝わり、奉納物には大師への感謝が綴られる。富めぬ者や健康でない者も包み込む四国は、救済の場所であった。

阿波・土佐・伊予・讃岐の四ヶ国は、仏教における「発心」「修行」「菩提」「涅槃」の道場に例えられるように、空海が伝えた曼荼羅の世界と各国の特徴も表している。後に一人であっても弘法大師とともにある「同行二人」の精神も誕生し、幾多の困難を乗り越え、結願後には大いなる達成感を得る。その背景には、四国の自然や文化が深く関わっていて、古き良き日本の伝統的景観が生き続けている。

四国遍路は、巡礼の形態が最も発展し庶民化した我が国の典型的巡礼であり、巡礼の完成形と位置付けられる。この独創性ゆえに、巡礼の中で唯一「遍路」と呼ばれ「お四国」と尊称される。聖なる島、四国の自然が生み出した弘法大師信仰に基づく四国遍路は、多様な宗教・思想を受容し発展させるという日本固有の文化を体現し、往

古の修行や巡礼形態を今に伝え、人々を救済し癒し続けている巡礼であり、それを支えているのが「お接待」に代表される生きた四国の文化である。ここに、人々を四国へ誘う求心力すなわち「四国ブランド」がある。この「四国ブランド」こそ「四国八十八箇所霊場と遍路道」を世界遺産へと導く「普遍的価値」にほかならない。

【参考文献】

- 『夏日漱石全集』（筑摩書房、1985年）
 四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』（法蔵館、2007年）
 頼富本宏『四国遍路とはなにか』（角川選書、2009年）
 真鍋俊照『四国遍路 救いと癒やしの旅』（NHK出版、2012年）
 武田和昭『四国辺路の形成過程』（岩田書院、2012年）
 四国遍路と世界の巡礼研究会『巡礼の歴史と現在』（岩田書院、2013年）
 四国地域史研究連絡協議会『四国遍路と山岳信仰』（岩田書院、2014年）
 『弘法大師空海展』（愛媛県歴史文化博物館、2014年）
 『空海の足音 四国へんろ展』愛媛編・香川編・徳島編・高知編（愛媛県美術館ほか、2014年）
 『四国遍路と巡礼』（愛媛県歴史文化博物館、2015年）
 稲田道彦訳注『四国偏礼道指南』（講談社、2015年）
 『四国遍路と世界の巡礼』1～3（愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター、2016～2018年）
 西村幸夫ほか編『回遊型巡礼の道 四国遍路を世界遺産に』（ブックエンド、2017年）
 『研究最前線 四国遍路と愛媛の霊場』（愛媛県歴史文化博物館、2018年）

Profile 胡 光（えべす ひかる）

愛媛大学 法文学部 教授

四国遍路・世界の巡礼研究センター 副センター長

1966年西条市生まれ。九州大学大学院博士課程を修了し、香川県庁に入庁。香川県歴史博物館建設や文化財管理に携わった。2011年から、愛媛大学法文学部准教授として、日本史を担当し、現在、教授。四国遍路・世界の巡礼研究センター副センター長兼任。四国遍路、四国の大名、四国の祭礼の研究が専門。世界遺産推進協議会など多数の委員を務める。共著に『回遊型巡礼の道四国遍路を世界遺産に』『四国遍路と山岳信仰』『四国の大名』『太鼓台の歴史』『内子町誌』など。